



人間性の涵養

— 序 論 —

倉 橋 惣 三

幼児教育の最も根本にして、最も重要な目的は、人間性の涵養にある。この事は、恐らくすべての教育においていえることである。しかし、幼児の教育において、特にそうである。

この他の教育目的も、幼児に対して、それらの重要性をもつてであろう。しかし、知的教育も、芸術的教育も、或は所謂道徳教育も、又宗教々育も、幼児教育としては、人間教育をその基本とし、要訣とする。幼児教育が基本教育であるということも、この意味にあるものであろう。

幼児教育の要求も種々ある。しかし、余りに多くを要求することは、無理である。また問題の先後を混乱して、或は過重となり、或は概念の羅列となり、教育の真実を失う。時と

しては先生の満足に終りて、生活の実味を欠く。論理の満足を求めて、論理系列の遊戯に墮すおそれもある。徒らに完全を求め、余りに高きを求めて、却つて空虚になる。怖れもある。教育は実を求め、真を辿る。人間性の教育は初めにし終りである。すべてが、その上のことである。この基礎なくして、あらゆる教育は、真の成長を得ない。芽を愛す。しかも、芽を重んず。芽を重んずるとは、芽を芽として重んずるがゆえに、芽以上を求めないのである。花を求めない。実を求めてはならない。それらは後のことである。芽を重んずるは、早咲きの花や、早なりの実を思わないことである。

芽は芽にて足る。幼児教育者はハンブルである。ハンブルであるが故に小さき点を愛する。誇張をきらう。見せかけを

思む。思みきらうというよりも、おそれる。微かなる点を求めて、そこに止まる。その代り、微かなる真実に敏感にしてそれを見失わないのみならず、その微かなるものに、一ぱいの価値をおく。微かさを気づかないのは、微かなるがゆえではなくして、求むるところの多きに由ることが多い。濃色を求むる目には、微かな色の美しさも、ニュアンスも感じられない。騒音に馴れる耳には、微かな楽音の微妙を聞かない。強い味に馴れる舌には、微かな味を味わない。幼児の生活の音も色も味は淡い。それを感じ得ないものは、幼児の傍にゐるに値しない。その人は、幼児以上の濃厚或は強烈の友となるがよい。況んや、その微かなる色と音と味とを真に幼児のものとして、養い育て、ゆき得る人ではない。

『お礼をいわない幼児のよろこび』『強いて尽さない幼児の好意』敢て敬意を表しない幼児の尊敬『歌わざる幼児の嘆美』しかもそのよろこびも、好意も、尊敬も、嘆美も、決して、無ではない。不感ではない。無関心ではない。その微かにして真なるものを、感じないものは、誰れか。そうして、またしても、感謝せよという。自己を尽せよ。尊敬の形をあらわせよ。声を美しくして歌えよというのは、誰れか。そして塩を加えよ、砂糖を加えよ、彩れよ、形にあらわせよと強いて、その微かなる味の真を失わせるものは誰れか。その人

は、幼児の傍にあるにたえないのである。憐れなるものよ。そうして、気の毒なのは幼児である。そうして、その憐れなる先生に對して、自分を濃してゆく術を覚えてゆくのである。そのたんびに、その微かなる真を失つてゆくのである。世に気の毒なものにして、微かな真を感じて貰えない幼児の如きはない。

筆者はこの論を草するに當つて、自ら題意の明かでないのを苦む。自ら題をかゝげてその意を詳かにしないのを恥づ。道徳教育といわず、宗教々育といわず、色も音も香もない人間教育としたのは、何んのこゝろか。——以上述べたところで、はい、分つて下さると思う。

※ ※ ※

